

【特別寄稿】

## 対話による「あいだ」の研究会 第一回

高橋 源一郎 × 辻 信一（大岩 圭之助）

(2019年8月9日)



横浜市戸塚区 善了寺にて

### はじめに：「あいだ」という言葉

**辻** ぼくと高橋さんの共同研究は「弱さの研究」から始まって、「雑の研究」になり、さらに今回の「あいだの研究」へと展開してきました。ぼくたちの研究会というのは、だいたい今日のように、公開で行われてきた。話は雑談風に進むんだけど、二人だけじゃなく、大勢の前で行われる雑談。今日のは、「あいだ」の研究会の第一回となります。

**高橋** この共同研究、もう10年もやってるんですね。凄いな。

**辻** 「弱さの研究」は、『弱さの思想』という本になり、「雑の研究」は『雑の思想』という本になった。その後、これからどうしようか、何か続けたいね、ということで、「あいだ」というテーマが浮

かび上がった。ぼくらはこの「雑」から「あいだ」へという展開にすごくわくわくしてるんですが、何をそんなにわくわくしているのかっていうのを、今日ここに集まった皆さんに伝えられたらいいなと思っています。

**高橋** ぼくたちは「弱さの研究」や「雑の研究」で何をやったのか。ひとことでいうのは難しいのですが、要するに、なんとなく気になっている事柄やものに、まず名前をつけるということなんです。ね。「弱さの研究」では、認知症の人とか、重度の心身障害者とか、そういう一般的に「弱者」といわれるような人たちをとり上げました。何か大切なものがそこにあると思ったわけです。そして、それに名前をつけてみた。たとえば「弱さ」です。ふつうは、「弱さ」には積極的な意味はありません。けれども、社会的に「弱い」といわれているもの

の中に、実は豊かな可能性があって、その「弱さ」を排除して残った「強さ」だけの社会は実は脆い、というようなことが見えてくる。そういったものを見つけるためには、まず言語化する必要がある。そうしないと分析もできません。そして、次にぼくたちが選んだのが「雑」だったわけです。

ですから、「雑の研究」でもまず、ことばから始まっています。「雑」という言葉は、辞書で引くと悪い意味しか載っていない。混雑、煩雑、雑草、乱雑、雑然、雑駁、猥雑、等々。良い意味を持ったことばはほとんどありません。いったい、なぜなんだろう。そのことを考えていると、「雑」が持っている、「強さ」や「豊かさ」が見えてくる。この研究の中でも、いろんな例を挙げました。例えば、今の小学校は、1年、2年、3年、4年、5年、6年って分かれてますよね。こういう年齢別の区別をやめて雑然としたクラスの方が面白いことができるし、豊かな場になる。たとえば、江戸時代の寺小屋がそうだった。これも一つの例ですね。「雑」ということばを通して見えてきた我々の社会の可能性です。気になっていることはたくさんあるわけですよ。それを一つのことば、定義づけを始めることで見えるように可視化して、調べていくというのがぼくたちのプロジェクトの特徴だったと思います。ある概念を見つけて、世界に結晶化させていくという作業だと思っていただければいい。

**辻** さて、「あいだ」という言葉は、「雑」にも負けず、非常に豊かな領域だと思われれます。でも、ちょっと辞書なんかで調べて見ればわかるんですけど、「あいだ」という言葉は、雑の場合とよく似ていて、なかなか欧米の言葉に訳せない。これは誰もが知っていて、よく使う言葉であるだけに、ちょっと意外な感じがしますが。「雑」も実に訳しにくい言葉でしたね。これはアジア的な概念なのかもしれない、ということも話しましたが、「あいだ」にも実は同じようなことが言えそうなんです。「あいだ」にはいろんな意味がありますが、その幅の広さをもっているような名詞が英語にはないですね。“between”って言葉は皆さん知ってますよね。前置詞で、“between A and B”という時

に使うことができたとしても、その“between”の中身を示す名詞はない。“betwixt”という古い言葉があるんだけど、“betwixt and between”という「宙ぶらりん」「どっちつかず」の状態を示す熟語でしかお目にかからない。

ぼくらが「あいだ」という言葉であれこれ考える、その思考の領域のようなものがどうも欠けているみたい、ということなんです。他の言語についても同じようなことが言えるのか、違うのか、また中国語や朝鮮語の場合はどうなのか、ぜひ調べてみたいなと思っているんですが。

言うまでもなく、「あいだ」とは二つの「もの」とか、「こと」とか、「ひと」とかに挟まれている領域のことですね。これは単に境界線ということじゃない。境界線という、ぼくたちは線を思い起こしますね。でも線というのは、広がりをもちませんから、例えばAとBの間に線を引くとすると、そのAとBの間には領域と呼べるような広がりは何もないわけです。むしろ、線というものは、AとBにあったはずの「あいだ」を消し去ってしまう。残るのはAという領域とBという領域だけ。AとBの境界と呼ばれるある広がりをもった領域に境界線が引かれた途端に、広がりとしての境界は消滅して、AとBという二項だけが残りAかBかという二元論になる、と言ってもいい。

また「あいだ」という言葉は、単に広がりとか領域を表すだけでなく「私とあなたの間」というふうに、「間柄」、つまり関係性を示す概念にもなる。「つながり」という意味ももっていますよね。AとBの間の広がりを表す言葉が欧米語にないのっていうと、例えば時間的にはインターバルという言葉、空間的にはスペースとカルームといった言葉で、その都度示すことはできても、そうした様々な場合を包み込むような概念っていうのはどうも見当たらない。

さてぼくがアメリカの大学院で文化人類学を勉強してた頃、特に惹かれていた人類学者に、ヴィクター・ターナー(1920-1983)がいました。この人の『ザ・リチュアル・プロセス(儀礼の過程)』は、その頃大変な人気があった本です。それはアフリカのンデンプ族の「通過儀礼」、特に子供たち

が大人になっていく「成年儀礼」についての研究です。子供というステータスをもつ存在が、大人というステータスに移行するための儀礼ですが、ターナーはその二つのステータスの「あいだ」にある、過渡期、中間段階、あるいは境界領域に注目したわけです。そのA（子供）とB（大人）の「あいだ」は、AでもないしBでもないどっちつかずの曖昧で不安定な状態なんだけど、同時にそれは日常の社会的な制約や束縛から切り離された自由な時空間でもある。

「あいだ」にあたる言葉が日常の言語にないからだと思うんだけど、ターナーは、ラテン語で敷衍を意味する「リーメン」という言葉から作った「リミナル」（形容詞）とか「リミナリティ」（名詞）とかという言葉をもって来るわけです。逆に、この「リミナリティ」という言葉に光が当たることで、「あいだ」という領域が、重要な研究テーマとして現れてきたんだとぼくは思っています。

同じ1960年代の始め頃に人類学者で、メリー・ダグラスという人がいて、やはり宙ぶらりんな「AでもあるけどBでもある」、「AでもBでもない」といった曖昧で不安定な領域というものに注目した。そして、この「あいだ」に挟まれているという「リミナル」なあり方から、「不浄」や「汚れ」の問題を捉えようとした。日本語だと、「汚れ」は「よごれ」とも「けがれ」とも読めるけど、この二つの間には大きな違いがありますよね。「よごれ」は単なる物理的、生理的な意味で使われるけど、「けがれ」というと精神的、象徴論的な次元に関わってくる。この「けがれ」が「リミナル」な在り方、間に挟まれた在り方から来てるんじゃないかっていう議論をして、これがまた大変な評判になったんです。その後この二人は、後続の学者たちに批判を浴びてるんですけど、ぼくは「リミナリティ」の議論が終わったんじゃないかって、もう一度これに注目する必要があるのではないかと思ってるわけです。欧米でこういう風にして一度注目されたことを考えていくうえで、日本の「あいだ」という概念が、重要な役割を果たし得るんじゃないかなと。

ということで、まず、高橋さんの方から、この

「あいだ」という言葉を使って、どんなふうにものを考えると面白いのか、その入口を示していただきたいと思うんです。

## 「あいだ」を作る

**高橋** ありがとうございます。では、始めましょう。最初に、ここ数カ月の間で書いたものを今日はもってきてみました。そして、これらが、全部「あいだ」の研究だったということに突然、気づいたんです。これは別に偶然とかシンクロニシティというよりも、気になっていたことを「あいだ」という観点で見ると、あっと驚くほど似ていた、ということだと思います。だからもしかしたら別の切り口のことばがあったら、そのことばにふさわしい別の見え方があったかもしれない。でも、一つことばがあると、より深く、そのものを見ることができるといえることですね。いくつか例を挙げてみます。ご存じの方も多いかと思いますが、ぼくたちと同じ明治学院大学の国際学部の先生だった加藤典洋さん。今年亡くなられましたね。**辻** ぼくは同じ学部の教員としての先輩であり、同僚でした。

**高橋** カナダでも一緒でしたよね。

**辻** はい、ぼくが学生だった頃、カナダのモントリオールで出会い、いろいろとお世話になりました。

**高橋** ぼくは加藤さんが担当していた講座の後を引き継ぎました。加藤さんから紹介されてこの職に就いたわけで、ぼくにとっても辻さんにとっても非常に縁の深い方だった。亡くなられて後、追悼文を書くようにいわれたんですけど、ショックが大きくて書けなかったんです。そして、しばらくたって、やっと「追悼」の文章を書くことができました。書く前に、加藤さんの本を何冊も広げて読んでいました。そうしたら、いまさらながら、新しい発見があったんです。その話をしたいと思います。最初に、加藤さんのエッセイや評論のタイトルを見ていったんです。すると、とても特徴的だとわかったんです。こういうタイトルです。たとえば、「なんだなんだそうだったのか、早く言

えよ、「ポッカリあいた心の穴を少しづつ埋めてゆくんだ」、「何でもぼくに訊いてくれ」、「うつむき加減で言葉少な」、「死が死として集まる。そういう場所」、「少しづつ、形が消えていくこと」、「世界をわからないものに育てること」、「苦しみも花のように静かだ」、「おいしいご飯のような文章を書くには」、「大きな字で書くこと」、「どんなことが起こってもこれだけは本当だ、ということ」、「水たまりの大きさ」。これが評論やエッセイのタイトルです。こういうタイトルをつける人は世界中で他にいないんじゃないかと思った。ほんとに例を見ないですね。たとえば、「死が死として集まる。そういう場所」。これ、評論のタイトルなんです。ぼくは作家だからかもしれませんが、異様な感じを受けました。普通なら、「集まる」の後には、「。」ではなく、せいぜい「、」ですね。「死が死として集まる、そういう場所」になるはずで。この「。」と「、」との違いはもしかしたらものすごく大きいんじゃないかと思ったんです。どういうことかということ、「死が死として集まる。」で、このタイトルは一回終わっている。読んでみると、「死が死として集まる」という発見がある。そこで、思わず、読者は立ち止まってしまう。でも、そこで終わりではなく、そういう発見がある場所があるよ、ということで、次のメッセージの「そういう場所」になるわけです。加藤さんのこのタイトルの場合は、一回メッセージが途切れるんですね。死が死として集まるんだよ、っていうメッセージがあつて。皆さん、そのことを考えてもらえましたか？ ぼくも考えました。そういつて、それから、ぼくはそういう場所の問題について書くつもりです。となつています。ふつう、どんな文章でも、ぼくたちはできるだけ早く伝えたい、と思つて書く。できるだけ早くメッセージを伝えたいと思うんです。誰だって。でも、加藤さんは、そんなに焦つて訊かないでくれつていつてるんですよ。自分が話している途中で、その話を中断するんです。そして、ほらもうすっかり受け身になつて聞こうとしてるでしょ、他人の話はそんなに真剣に聞いちゃだめですよ。そういつてる気がするんです。どういうことかということ、自分で考える

時間がなくなつちゃうからです。つまり、読者としての自由を保障するためには、一旦、そんなに食い入るように聞いてはいけない、と注意を促している。これは大事なことです。ぼくたちは、真剣なものごとを考えなければいけないけれども、同時に何かを読んだり、何かを聞いたりするとき、素直に聞きすぎることがある。それは、実は危険なんです。だって、その時間、その相手に世界を奪われている。では、どうしたらいいのか。加藤さんは、一回止まれ、つていうわけです。死が死として集まる。そこで、「止まれ」の号令がかかる。止まった瞬間に一回、時間が止まるんですね。加藤さんが提出した問題の前に、加藤さんと読者が同時に佇んで見ている。ぼくはこれを、「あいだ」を作る文章だと思つています。ことばを作るという作業として、とても大切なことなんだと。素晴らしいことをいえばいいのか、ではないんですね。なにかをいつた後に時間をあける。そして、読者に選択の時間を与えないといけない。ぼくたちは、ただ素晴らしいものは、読めばいつてわけじゃない。ほんとうに、そうではなくて、下手でも、大した表現ではなくても、読者に自由に「ものを考える時間」を作らなくちゃいけないつていうことを示しているのが、加藤さんのタイトルなんです。もう一つ、このことに気がつてから、もう一回加藤さんの書いたものを読み返して、他のことにも気がつきました。加藤さんは、ぼくのデビュー作である『さようなら、ギャングたち』という小説の解説の中で、その小説の冒頭の文章の分析をしてくれています。小説の冒頭の文章は、こうです。ちょっと、聞いてください。

「昔々、人々はみんな名前をもつていた。そして、その名前は、親によってつけられていたものだと言われている。

そう本に書いてあつた。

大昔は本当にそうだったのかもしれない。

そしてその名前は、ピョートル・ヴェルホーヴェンスキーとか、オリバー・トゥイストとか忍海壽（おしぬみじやく）とかといつた、有名な小説の主人公と同じような名前だった。

ずいぶん面白かつただろうな。

『おおい、アドリアーン・レーベルキューン殿、貴公いずこに行かれるのか?』

『どこへいとうとわいのかってやないけ? そうやる、森林太郎ちゃん』

今はそんな名前をもっている人間はほとんどいない。政治家と女優だけが今でもそんな名前を持っている。」

これが、冒頭の文章なんだけど、加藤さんは、今言った文章の中で、3行目と4行目と7行目がいらないうらと書かれていました。どういうところかっていうと、「そう本に書いてあった。」「大昔は本当にそうだったのかもしれない。」「そして「ずいぶん面白かっただろうな」と、この3箇所です。この部分、ほんとうにいらないうらです。意味だけ考えれば。加藤さんは、こう説明しています。

「ここで何が普通の小説の文章とまったく違っているかというところ、ゴチックで組んだこの文章の第三行目、四行目、七行目は、いわば世界に新たな氷結を促すため、ここに送り込まれた先の文の文脈とはいったん切れた文で、これは、先の文の文脈を殺し、新たな文脈を作る、殺し屋である。ここでそれまでの文の文脈はポキリと音を立てて脱臼している。ポキリ、ポキリ、そして二行おいてまたポキリ。高橋源一郎の言葉が好きだという人は、このポキリ、ポキリと堅い骨が次から次に脱臼し氷でいうと先の氷が壊れ、その先が新たに再氷結していくリズムが快いのだし、全然わからん、という人は（そういう人もいまはいないだろうが）このところを味わう感受性が、残念ながら、ないのである。」

ぼくは、この冒頭の文章を書いた時のことをよく覚えているんですけど、今言われた3行目、4行目、7行目を一番真剣に書いたんです。この部分をとるとわかりやすい良い文章になるのはわかっていた。でも、それが嫌で。何かもうちょっと、言い方が難しいんですけどね、真剣に読まれすぎないようにするにはどうしたらいいかって考えたんだと思います。その結果、「余分」な3行目、4行目、7行目が生れた。そのとき、ぼんやり考えていたのは、素晴らしい詩の欠点は感動しすぎることだっていうことです。その結果、その詩に飲

み込まれてしまう。それではいけない。感動しながら、同時に、醒めていなければならない。どこかで、その感動をかすかに疑ってもらえるのがいいと思ったんです。それが、さっきいった、「あいだ」を作るということです。「あいだ」を作ることで、そのときぼくらが受けとるべきもの以外の余分ななにかを受けとる。そうすると、ぼくたちは、少し不安になる。これは何だろうっていう怯えとか恐れ。その方が、感動そのものより大事なんじゃないのかなって思うんですね。

もう一つ、加藤さんの「あいだ」を作るという仕事に関して、徹底的だと思ったのは、『敗戦後論』という大変話題になった、というか、論争になった評論を書かれたときのことで。何が問題とされたのか。いくつも論争になった点はあるんですね。とりわけ、前の戦争の「敗戦」について、ぼくたちは、どう考えればいいのか。先に鎮魂されるべきなのは、日本軍によって殺されたアジアの人たちなのか、日本人の死者なのか。でも、ぼくがいちばん深く考えさせられたのは、「戦争」とは直接関係のない、ハンナ・アーレントについて書かれた部分でした。加藤さんは、これを「語り口の問題」と呼んでいます。ざっと説明すると、ハンナ・アーレントというユダヤ人の偉大な女性哲学者が戦後に行われたアイヒマン裁判を傍聴して、その裁判についての詳細な評論を書いたわけです。アイヒマンは、強制収容所の、アウシュビッツのですね、そのトップとして、膨大な数のユダヤ人を虐殺した責任を問われて、裁判をイェルサレムで受けるんです。そこに、世界中からジャーナリストが集まった。ハンナ・アーレントは『ニュー Yorker』という雑誌に依頼されて、ずっとエルサレムで取材をした。それをまとめて、雑誌に掲載し、後に『イェルサレムのアイヒマン』という本になります。これは大変有名な本で、「凡庸の悪」という言葉はこれから生まれているんですね。でも、雑誌に発表直後、大変な話題になったというか、大騒ぎをかった。アメリカの戦後の文化的な話題の中でも最も炎上した例です。アーレントは、ユダヤ人社会から激しい批判を浴びたんです。その理由は三つあります。第一に、アー

レントは、実は、ユダヤ人を強制収容所に連れてゆくのにユダヤ人組織も協力したと告発しています。特にフランスですね。その問題について厳しく批判した。それからもう一つは、ドイツにおけるヒトラー暗殺計画みたいのがありましたよね。あの、いわゆるドイツ保守派のレジスタンスについて、これもまあ大したことはない、そのことを批判している。この二点、これはわかるんです。実は三点目が大きな問題となった。というか、ぼくは、いちばん大きな問題だと思います。これこそが「語り口の問題」と呼ばれることになった問題だったのです。簡単にいうと、きわめて深刻、重大な問題について、アーレントは、厳しく批判しているが、その批判のためのアーレントの文章が「軽い」と批判された。不真面目だ、ということです。実はここが一番問題になった。つまり、アイヒマン裁判のような、数百万人のユダヤ人が虐殺された問題についての裁判のドキュメントなのに文章が軽すぎる。アーレントを擁護していたユダヤ人の知識人層もこの文章にだけは耐えられない。どういう文章かっていうと、こういう文章なんです。これは冒頭の文です。

「[Beth Hamishpath]—[正義の家]。延丁があらんかぎりの声で呼ばわったこの言葉にわれわれは座席から飛び上がった」

ちょっと略しますね。

「裁判官席のすぐ下にはすぐ通訳たちがいた。被告か弁護士と裁判官が直接話を交わすときには彼らの働きが必要とされたからだ。それ以外の場合には、ドイツ語を話す被告とその弁護士は、他のほとんどすべての人々と同様にヘッドフォンをつけて、同時通訳によってヘブライ語で行われている審理を聞いていた。フランス語の同時通訳は優れており、英語のはまあどうかという程度のもものだったが、ドイツ語のはまったく滑稽な、しばしば意味がわからないこともある代物であった。」

確かに、「意味」を伝えるためであれば、「我々は座席から飛び上がった」とか、「意味がわからない代物だった」という部分はいらないでしょう。いらぬ部分というより、その嘲笑的な表現は、削除した方がいいと思う。そう考える人たちは多

かった。ここにも、さっきの「3行目、4行目、7行目」問題がある。アーレントもそうです。その部分は「いらぬ」のではなく、逆に必要だった。『イェルサレムのアイヒマン』という作品を書くためには、そんな文体が必要だった。そのことが大きな対立点になったわけです。でも、そのことについて、アーレントは語っていません。

なぜなんだろうか。加藤さんは『敗戦後論』の中で、アーレントの「軽薄な」語り口の対極にあるものとして、『敗戦後論』の加藤さんを批判した高橋哲哉さんの文章を引用しています。つまり、アーレントが書きたくなかったような文章、「真面目な」文章ですね。こういう文章です。

「長い忘却を経て歴史の闇の中から姿を現した元慰安婦たち、彼女たち一人一人の顔とまなざしは『汚辱を捨て栄光を求めて進む』『国家国民』の虚偽あるいは自己欺瞞を、最も痛烈に告発する『他者』の顔、『異邦人』ないし『寡婦』のまなざしではないだろうか。この記憶を保持し、それに恥じ入り続けることが、この国とこの国の市民としてのわたしたちに、決定的に重要なある倫理的可能性を、さらには政治的可能性をも開くのではないか」

これに対して、加藤さんはこういうことを言っています。

「日本の場合だったら、南京大虐殺、朝鮮人元慰安婦、七三一部隊などの問題に対して、そういうもの前で無限に恐縮する、無限に恥じ入ることが大事だという高橋さんのような人がいる一方で、これでは脈がない、これは違う、これはいやだ、思想というのはこんなに、鳥肌が立つようなものであるはずがない、という僕みたいな人間もいる」

これ以上詳しくは加藤さんは説明していません。なので、ぼくが少し補足をするように考えてみたいと思います。アイヒマン裁判はもともと死刑になることが決まっているんです。アイヒマンに罪があることは100パーセント確実なんです。ナチスは100パーセント黒だから。では、アイヒマン裁判は何のためにやるのか。それは、「儀式」だからです。100パーセント死刑が確定している人間なんだから、すぐに死刑にすればいい。でもそれはできないから、儀式として裁判をする。

するとどうなるのか。それを伝える言葉も全部儀式になっちゃうんです。いかにアイヒマンが悪いかという報告だけが延々と続くだけ。このとき失われてしまうのは何なのか。結局、アイヒマン裁判で証明されるのは、正しさの正しさだけです。正しいことは正しいよ、と。そして、そのことを自明の前提として、裁判という名前の「儀式」をぼくたちは見ることになる。ぼくたちは、何も関与できない、ということです。では、どうすれば関与できないものに関与できるのか。ハンナ・アーレントがやったのは、いわば「正しい」文章に3行目、4行目、7行目を、無理やりこじ開け、ねじこんだ、ということだと思います。その「あいだ」に何が入ってきたかっていうと、ユダヤ人だって無垢ではない、ということ。ドイツでナチに立ち向かった人だって無垢ではない、ということです。そう、別の言い方をするなら「無垢」なんてないということです。誰もある程度罪深く、またある程度正しいのだ。だからあのアイヒマンを絶対悪でなく「凡庸の悪」と呼んだのも、彼もまた「あいだ」の存在にすぎないからなのです。でも、そのことをきちんとした文章で書くと、いや「正しい」文章で書くと、そこにまた、別種のうさん臭い「正しさ」が生れる。だから、アーレントは「正しくない」文章でそれを伝えようとした。それが「あいだ」を開ける文章だった。それを作ることが、ハンナ・アーレントのアイヒマン裁判での態度だった。「椅子から飛び上がった」っていうのは、彼女の「あいだ」を作る文章だったと思います。これがぼくにとって一つの「あいだを作る」やり方です。でも、このことに気づいたのは、これらの文章を読んでからずっと後のことです。じゃあ、どうやって気づいたのか。さっきいったように、考えさせてくれる余裕が、その文章にあったからです。ぼくたちが入ることができる隙間、「あいだ」がある文章だったからなのです。この、加藤さんとハンナ・アーレントの問題を、「あいだ」という角度から見たら、見えてくるものがある。ことばとしては、「あいだを作る」という一つの取り出し方をしたときに、考える対象が新たに一つ生れる、ということですね。

アイヒマン裁判がいい例で、口出しできないんですよ、あれ。つまり、もうすべて証拠は揃っている。100万人殺した責任を誰かが取らなきゃいけない。

**辻** しかも裁判の場所を、エルサレムにしているわけですよ。ドイツでもなければ、捕まった南米でもなく。それを戦後に建国されたイスラエルに連れてきてやる。まあ一種の劇場ですよ。

**高橋** そのことについて誰も文句をいえない。ユダヤ人の数百万人の犠牲という事実の前には、どんな疑問も差し挟むことができない。おかしいよっていえないことがあるでしょう。でも、「おかしいよっていえない」ことがある、ということ以上に、「おかしい」ことはないはずですよ。ハンナ・アーレントは、「あいだを作る」文章を書くことによって、「おかしい」といったのだ、と思います。あれは、異義申し立て、誰もが絶対だと思うものを批判していく場合に必要な文章だった。アイヒマン裁判の内容についての具体的な批判はそんなにないんです。でも、「あいだを作る」文章によって、裁判のあり方そのものを批判していったんですね。

**辻** あとで『ニューヨーカー』が、あまりにも長すぎるので切り縮めるようにと言ってくるんだけど、アーレントはそれを拒否しますよね。全体を掲載することを主張する。つまり、一見不要に見える「あいだ」を取ってしまったてはいけないということだったわけですね。

## 「あいだ」を生きる

**高橋** 二番目の話は、これも今月号の『新潮』に載っているものです。実はこれ、批評家の江藤淳さんの没後20周年の講演会があって、その講演録です。この没後20周年の講演会で、ぼくの前は上野千鶴子さんでした。なので、上野さんとぼくのものと一緒に載っています。その中で、いくつか気づいたことがあります。まず不思議なのはですね、江藤さんの本のタイトルには一つ特徴があるんです。特徴がある、というところは、最初に話した加藤さんの場合と同じですね。中身は違って、

そのタイトルの特徴は、「と」が多いことです。「& (アンド)」ですね。『アメリカと私』、『成熟と喪失』、『漱石とその時代』、『文学と私』、『戦後と私』、『自由と禁忌』。ものすごく多いんです。実は、ぼくの前で講演をした上野さんもそのことを指摘されていました。なんで「& (アンド)」ばかりなんだろう、と。もう一つは、というか、最初の一つに含まれることなんですが、実はこの「と」つまり「&」がですね、「同じ」じゃないんです、ほとんどの場合。『成熟と喪失』や『自由と禁忌』では、相反することばが「と」で結びついている。『文学と私』、『戦後と私』、『アメリカと私』といったところでは、大と小なんです。というか、「私」と「私より大きいもの」という対比になっている。ほぼ最晩年に書かれた『妻と私』だけが違う。いや、違わないのかもしれませんが。最後に「と」は、ほんとうの「対」となって消滅してしまう。亡くなった奥さんの後を追って、江藤さんは自死を選ばれたのです。これもいろいろ考えさせられますね。

「何か」と「何か」、というか、何か「と」何か、というタイトルにずっと拘っていらした。たぶん無意識だと思います。作家の無意識を調べるのがぼくらの仕事なので。

ところで、今からお話することは、以前、お話ししたことの続きでもあるんですが、去年、「今読むべき戦争文学」というラジオの番組で3つ作品を選びました。向田邦子の『布団』、野坂昭如の『戦争童話集』、小松左京の『戦争はなかった』。そのお話をしましたね。前回いらした方は覚えていらっしゃるかもしれませんが。ふつう、戦争文学というと、大岡昇平の『野火』とか、野間宏の『真空地帯』とかを思い浮かべる。でも、ぼくが選んだのは、いわゆる有名な戦争文学作品ではなかった。なぜ、そんなものを選んだのか、自分でもわからなかった。でも、放送前日になって突然気が付いた。選んだ3人の作家の終戦時の年齢について調べると、16歳、15歳、14歳だった。終戦時に、中3から高2ぐらい。では、なぜ、彼らを選んでしまったのか。それは彼らが、他の世代にはない経験をしたからだという結論だったわけで

す。そして、今回、江藤さんの作品をまとめて読んでまた、そのことが気になったんです。それで調べてみると、江藤さんは終戦時13歳。あのグループに入っています。この理由は今回わかりました。江藤さん自身が、『昭和の文人』という彼の作品の中で、福沢諭吉の「一身で二生を経る」ということばについて考察されています。それは、一つの身で、二つの時代を生きるという意味です。つまり、どういうことかという、生きているあいだに時代は変わってしまったということです。なので、二つの時代を生きる、ということを一身上で二生を経る」と呼んだのです。さっき申し上げた江藤さんたちの世代がまさに、その「一身で二生を経る」経験をした世代だったのです。しかも、その「移行」の期間が、いちばん感受性の柔らかい青少年時代だった。それが、江藤さんたち世代の特徴です。もっとも感受性が柔らかな時代に軍国主義教育を受けて、その途中で戦争に負け、いきなり民主主義教育に変わった。もっと上の世代は、違います。軍国主義教育を受けて、人格ができあがっちゃったか、あるいは、そんなものはぜんぜん受けつけず、社会主義思想に走った者たちとか。要するに、軍国主義の影響を受けなくてすむか、完全に受けちゃったかどっちかです。ところがその下の世代、さっきいった、16歳、15歳、14歳、13歳の世代は、軍国主義の教育を受けている途中で、民主主義教育に変わった。しかもそれを教えている先生は同じなんです。天皇家陛下万歳」といっていた先生が、今度は「民主主義万歳」という。簡単に変わる。それをまざまざと見ていた。これが「一身で二生を経る」世代です。

これはまさに、時代と時代の「あいだ」を生きるということですね。戦前、軍国主義の時代を生きる、のでもなく、戦後の民主主義の時代を生きる、のでもない。その「あいだ」をこそ生きなければならなかった、複雑な世代がいる。向田邦子も野坂昭如も小松左京も非常に複雑です。民主主義を謳歌するわけでもないし、戦前を懐かしいと思うわけでもないし。作品全体に、不思議な緊張感が漂っている。これが「あいだ」を生きる人たちの独特の言語感覚につながっています。この



1945年問題はわかりやすい例なんですけど、実は、その前にも、日本で「一身で二生」を生きた時代があった。福沢諭吉が言及しているくらいですから、当然明治維新の辺りです。明治も初期の頃は感覚的には江戸時代と変わってなかった。ご存じだと思いますが、江戸の庶民は天皇のことを知らなかった。西から変な人が来るらしいよって思っていたくらいです。ずっと江戸幕府の下、将軍様が支配者だったんですからね。では、こんな感覚は、どこまで続いたか調べてみたんです。ターニングポイントになったのは、明治15年の西南戦争だといわれています。その頃になってようやく、天皇が偉い、ということに人びとは気づいていった。だから江戸的なものから明治への変化は、大体明治15年くらいに起った。そのとき、漱石が15歳。正岡子規、幸田露伴、南方熊楠、みんな15歳です。彼らこそ「一身で二生を経る」世代だった。彼らは、もの凄く優秀なんですけど、同時に、その前後の世代とは隔絶したところがあるような気がします。彼らは「あいだを生きる」というより、「あいだを生きねばならなかった」世代だった。つまり、彼らは自ら望んで「二生を経る」ことになったわけではなく、強制的に二つの時代を駆け抜けざるを得なかった。それも、14、5歳の頃に。「あいだ」という時代区分は、そういったときに生れるものなんだと思います。

三番目は、「あいだを動く」です。ぼくは、『ヒロヒト』という小説を連載してまして、ちょうど今「震災と女たち」という章をずっと書いています。その中に、最近映画も公開された金子文子という女性、大逆事件で逮捕された女性革命家が登場します。ちなみに、大逆事件というのは、天皇、皇后、皇太子に危害を加えようとするときの、大逆罪となるような事件で、日本で四度起こりました。有名なのは、幸徳秋水たちが逮捕された明治43年のものです。それ以外にも、難波大助が当時の皇太子を襲撃した虎ノ門事件や李奉昌が昭和天皇を襲った桜田門事件など、全部で四件あって、その四件目がこの金子文子と彼女のパートナーだった朝鮮人の活動家・朴烈（パク・ヨル）が起こしたものです。日本人と朝鮮人のカップルによ

る大逆事件ですね。彼らは、関東大震災の直後、朝鮮人虐殺のさなかに逮捕されるんです。その金子文子は捕まったときに21歳、そして23歳で獄中で自殺してます。非常に若かった。彼女は13、14、15歳の頃は朝鮮にいました。お祖母さんのところに。そして、ずっと朝鮮の人たちが虐待されるのを見て育ち、日本に戻ってくるんです。それで、朴烈という朝鮮人と付き合うようになって、運動家になるんですけど、ほんとうに素晴らしい文章を書く人です。彼女はほとんど教育を受けていません。戸籍がなかったのです。だから、小学校にも中学校にもほとんど行けていない。自力で学んだのです。そして、刑務所で膨大な伝記を残していますが、読むと、素晴らしい知性の持ち主であったことがわかります。すごいと思うのは、当時、朝鮮人虐殺が起こったように、日本人と朝鮮の人たちとのあいだに巨大な壁があったのに、彼女はそれを楽々越えたことです。日本と朝鮮のあいだ、日本人と朝鮮人のあいだ、日本語と朝鮮語のあいだを、彼女は自由に往還することができた。彼女は移動する人でした。彼女が見た風景は、おそらくほとんどの日本人が見ていた風景とは違うと思います。動いている人間が見ている風景と、ある一定の場所から動かない人間が見ているのはほんとうに違うのです。ここは長くしゃべりたいところですが、時間もないので、またいつかということにしておきましょうか。

皆さんご存じのように、日本と韓国のあいだには摩擦がある。というか、それは日本政府と韓国政府が勝手に作り出した部分も多いんですが、やはり、お互いのことを知らない、ということも大きいと思います。知り合いがこの前「韓国は反日教育やってるから」って言ってたんで、どういう教育か知ってる？って訊いたら、よく知らないって、いうわけです。ひどい話ですよ。なにごとも「知る」ことが前提です。実は、ここ最近ずっと、歴史教科書読んでるんです。いろんな国の。もちろん、韓国のものも、です。教科書って、まあその国の自画像が描かれている場合が多い。同時に、そこに書かれている日本は、ぼくたちが知っている日本とは少し、ときにはかなり違っていま

す。それは、ぼくたちが「外」からは、どう見られているかを教えてください。韓国の小、中、高の歴史教科書を読んでみたんですが、かなり厳しい描写とかもあることはあるけれど、正直にいうと、被植民地国の教科書だったら、これはふつうじゃないかと思いました。日本人と日本帝国主義をちゃんと区別してるし、不必要な憎しみは煽ってもない。ただ当然、ぼくたち日本人がふつうは知らないような事実が大量に書かれている。それは仕方のないことなのかもしれない。植民地であった朝鮮、韓国の人たちにとっては、統治されていたところからどうやってアイデンティティを回復していくかっていうのが、歴史教育の本質になっている。統治していた側の日本は批判しにくいし、もし、有意義な批判があるとしたら、それにはどんな論理があり得るのか。そういうことを考える必要があると思います。それがなく、反日教育だと文句をいっているだけじゃダメです。他の植民地にされていた国の歴史教科書は、もっとすごいですよ。とにかく、「公定」といわれるような歴史教科書は、世界中どの国でも、危なっかしい爆弾のようなところがある。公定や国定だったら、当然国家の意思が反映されているわけですからね。ちなみに日本の歴史教科書は、おそらく世界で一番薄い。断然薄いと思います。それから、ほとんど愛国的じゃない(笑)。意外と中立的、というか、そもそも歴史に興味がないって感じがするのはおかしいですね。少し脱線しましたが、「あいだを動く」ということで、金子文子のことを紹介しようと思ったのだけど、一つ今思いついたのが、「あいだを埋める」ということですね。

### コミュニタス・反構造としての「あいだ」

**辻** 「あいだを埋める」っていうのが実は「あいだを作る」ということでもあるんだと思いますね。今の高橋さんのお話を聞いた上で、ぼくが最初に前置きとして言ったことをもうちょっと整理してみたいと思います。まず一つは、「あいだ」とは何かと何かの間ですよ。その何かが「こと」だったり、「もの」だったり、「ひと」だったりするわ

けです。今、AとBのあいだに線を引くとする。線を引いた途端に、広がりとしてあったはずの「あいだ」はしぼんでしまう。「あいだ」がそれ自体ではなくなる、と言ってもいいかな。そこで、高橋さんが言われた「あいだを作る」という営みが出てくる。「あいだを生きる」とか、「あいだを動く」というのも、実は「あいだを作る」と同様、見えなくなってしまった「あいだ」を可視化したり、なくなりかけた「あいだ」にまた息を吹き返らせる営みだと考えられるわけで。

これが一点、そしてもう一つが、さっきもお話しした、ヴィクター・ターナーが「リミナリティ」という言葉で注目した「あいだ」の問題です。彼の先駆けとしてファン・ヘネップ(1873~1957)という人がいて、「通過儀礼」を分析して、分離・過渡・統合という三つの段階に分けたんですね。どの文化でも人は誕生から死まで、人生の節目で、儀礼を経ながら、成長したり、大人になったり、年寄りになっていく。別に区切り目があるわけじゃなく、成長も老化も連続的な変化なんですけど、そこにそれぞれの文化が人為的な境界を作る。それをちゃんと通過することで、一人前の人になるというわけですね。その「通過儀礼」の中でも特に三段階の真ん中にある「過渡」に注目して議論を展開したのがターナーだった。

ンデンプ族の「成年儀礼」で、若者たちはまず、「分離」によってそれまで自分が所属していたはずの社会から切り離される。「過渡」の段階では、彼らはいわば古いアイデンティティを失ってしまっているんだけど、その代わりに新しいアイデンティティもまだ獲得していない。社会から切り離されているけど、まだ社会へと再度「統合」されてもいない。取り込まれてもいない。ターナーはこのどっちつかずの曖昧な過渡の段階を「リミナリティ」と呼んだわけです。しかし、この曖昧さとか中途半端さというのは単にネガティブなものだけではなく、実はこの「あいだ」にこそ重要な役割があると彼は考えたわけです。

そこでは一体何が起きているのか。子供が子供であるっていうのは、その人が所属する社会によって構造的に規定されていることですよ。子

供はみな社会的に規定された「子供」というステータスを生きて、「子供」という役割を演じている。大人っていうのも同じことで、社会構造の中の「大人」です。じゃあ、その真ん中にある「成年儀礼」の中では、参加者たちはいわば構造の狭間にいると考えられるわけです。その狭間の、ターナーの言葉で言えば、「リミナル」な、つまり「しきい」の上の状態にある若者たちの中には、平等意識や共同体的なつながりが生じる。これをターナーは「コミュニタス」と呼ぶんです。通常のコミュニティの絆みたいなものを剥ぎ取られたところに生じるので、「コミュニタス」は「コミュニティ」に対して、もっと原初的で根源的なイメージでしょうか。ターナーは合わせて「アンチ・ストラクチャー（反構造）」という言葉さえ使っていて、とにかく「アンチ」が好きだったばくなんかはそれだけでワクワクしたんですけど。

がちりしたのに見える社会構造の中に、ちゃんと隙間があって、そこに「反構造」が息づいている、というのはやっぱり面白いと思うんですよ。とはいえ、「過渡」の段階を過ぎて、若者たちはまた社会構造へとみんな何食わぬ顔で再統合されていくわけですけど。それでも、1から3へボンと飛ぶんじゃなくて、ちゃんと2がある。構造と構造の「あいだ」に、「反構造」が生きている。そのコミュニタスのエネルギーに助けられて若者たちが変成を遂げる。生まれ変わった人としてまたコミュニティに迎え入れられる。迎え入れることによって、社会もまた更新され、再生する。こういうことが大切なんだと思うんです。

「反構造」というと構造に敵対するもののように思われるけど、そうじゃないんですね。構造が秩序を支えるわけだから、安定的なものであることは当然でしょうが、だからと言って、ガチガチに固定的で、弾力性をもたない構造はやはり危ういでしょう。世界は常に流動しています。個々人の人生だって、日常的な秩序の安定が必要だけど、その一方で確かに変動し続けていて、何ものも不変ではあり得ない。諸行無常ですよ。その意味で、構造の中に「反構造」という要素があればこそ、構造もまた持続可能でありうるんじゃないかな。

そう考えると、「通過儀礼」という個々人の大きな節目となる移行期に、どっちつかずの「あいだ」をもつことが、個人にとっても、社会にとっても大切だったんだと思います。

高橋さんの言う「あいだを作る」や「あいだを生きる」というのは、近代化した社会の中で、表現者たちが自前のコミュニタスや「反構造」を作り出そうという試みだったのかもしれない。さらにちょっと極端なことを言えば、生きるということ、それ自体が「あいだ」である。生きるってことはプロセスですから。そして常にすべてが変転していく。その意味では、一刻一刻がAとBの「あいだ」ということになる。命そのものが常に自らを創り出しながら、刻々自らを再生していく営みです。そこまで行っちゃうと、木村敏さんの名著、『あいだ』にまで話が及んで、また長い話が始まっちゃうんで、この辺でやめておきますが。

## 生と死の「あいだ」

**辻** さて、ここからはばくが用意してきた話を二つさせてもらいます。一つ目は、お盆が近づいているんで、それにちなんだ話です。若い人はお盆ってなんか知っていますか？ ご先祖たちの魂が帰ってくるのを迎える。生者と死者が交流する、といってもいいでしょう。ということで、今日は生と死の「あいだ」っていうことに触れておきたいなと思います。

ぼくの兄、大岩剛一がこの四月の末に亡くなりましてね。ほんとに仲の良かった大好きな兄ですから、その前後からの半年あまりっていうのはぼくにとって、何ていうのかな、英語で言うとインテンスでありながら、かつ非常に充実した、ある意味、楽しい日々だったんですね。それこそ、何かと何かの「あいだ」の「リミナル」な時間だったなと思います。亡くなる前、去年の暮れぐらいからぼくの体にも心にもいろんな変化が起こってたんですが、亡くなってからのこの数ヶ月は、すごく変なことがいっぱい起こった。魂がちょっとこう抜けちゃったような感じなんですよ。考えてみれば、ぼくと兄とは昔から非常に親しくて、あ

る意味じゃ魂を共有していたようなところがあったはずだから、二人のうちの片一方がいなくなっちゃったときに、共有していた魂がどうなっちゃうのかなって考えれば、まあ、そのぐらいのことはあるよなっていう感じはしました。この前、ドイツから来日した植物療法士の友人にその話をしたら、彼はいや全くその通りだ、と言う。実際にそういうことはあって、親しい人の死とともに、共有していた魂の一部が死者とともに行ってしまふので、魂が抜けた状態になる。でも、大丈夫、しばらくすると、ちゃんと戻ってくるから、と断言してくれて、とてもうれしかった。戻ってくることもだけど、何より、根源的な何かをやっぱり共有していたんだ、というのがうれしかった。

誰でも死というものを通して、生と死の「あいだ」っていうのを考えざるをえませんよね。ある意味では、生きていうこと自体が、生きていない状態から生きていない状態までの「あいだ」です。もちろん、人間だけじゃなく、すべての生きものがその「あいだ」を生きているわけだけど、でも、それを生まれる前と死んだ後の間として「あいだ」を意識しているとなると、これはやはり、人間の特徴ということになるのかも。そもそも、「人間」という言葉自体が、人の「あいだ性」を示している、とよく言われますよね。和辻哲郎は個人をまず最初に置く西洋個人主義に対して、人間は人と人との間があってこそ人間だと考えた。人に限らず「もの」や「こと」などからなる、無数の関係性の網の目として人間を見る見方は古代から世界各地にあったんだと思います。そうすると、存在しているってこと自体が、ある意味「あいだ」である、という、さっきの話のようなことにもなる。

さて、お盆だということもあって、ぼくの兄が遺した文章を紹介させてもらいたいと思うんです。彼は建築家として、実は今ぼくたちのいるこの建物（横浜市戸塚区善了寺聞思堂）の設計をしたのも彼なんですね。自然建築といって徹底して自然素材を使う。伝統建築でよく使われた、木、藁、麻、葦、竹・・・やがては全てが土に戻っていく、そういう建物を目指していました。そし

て彼が建築家として注目していたのが、「あいだ性」なんですね。都市、ランドスケープ、里山、そして建築について、いくつかの著作を遺しましたが、「あいだ」についての関心はとても強かった。例えば、家の内と外の「あいだ」としての縁側、窓、玄関、土間など。彼は「壁」というのも、単に外と内を隔てているんじゃないで、外と内をつなぐものとして見ていた。家そのものが外との関係性の内にあるものなんじゃないか、そういうことを考えていた建築家なんです。

兄はまた長く成安造形大学という滋賀の大学で教えながら、近江学という地域研究にも熱心に取り組んでいたんですが、その彼が連載してきた『近江学』という雑誌に書いた最後の文章、いわば遺稿ですが、そこから一節を読んでみたいと思います。これはお盆というものがなんだかわからない人のためにも、とって用意してきました。

「古来より、集落を取り巻く山並みの向こうには先祖の霊が眠る他界が広がっていると考えられていた。お盆になると、祖霊がこの山を越えて村を訪れ、家族のもてなしを受けて再び山の向こうに還っていく。仰木では先祖の名前がはいったオショライさんと呼ばれる薄い板（経木）を仏壇に供えるが、昔はザシキの前の縁側にオショライさんを並べた盆棚を置いて先祖の霊の送り迎えをしたという。

縁側とは面白い場所だ。内と外を隔てるただの境ではない。ある想いが日常の生活圏からはみ出して、どこか遠い、見知らぬ世界に向かおうとする際の起点になっている。縁側があゝの世からの客を迎えたり送ったりするときの、家のターミナルポイントになっているのだ。

つきやま  
築山とは、いわば身近な生活空間に創り出されたオショライさんのすむ山であり、他界の風景である。お月見もそうだが、昔の家にはこのように実に雄大なスケールの時空を超えた眼差しがあった。だが、どれも現代の住まいから失われてしまった視線だ。

里山は循環する魂のスミカ。家の中で、村の辻や道端の地蔵の前で、死者の魂と生きている者の魂が交感し合う終のスミカなのである」

（大岩剛一「循環する魂のスミカ-仰木の里山から」『近江学』第11号、2019年1月10日発行、50頁～

51 頁)

これは「循環する魂の住処」という文章の一部です。ここにはまず生者の世界と死者の世界、つまり他界との関係性が語られている。縁側って若者にわかるかな。あの縁側っていう空間、世界中にありそうでいて、実はなかなかないんですね。日本でも、今では滅多に見なくなりました。内と外をつないでいるっていうことが、縁側ほどわかりやすいものはないでしょう。外から人が来て、中に誰がいようがいまいがそこに座っていたり、気づくとお茶が出てきたり、ベンチのようでもあり、一種のカフェミたいな領域でもあった。まあ、これは生きている人間同士をつなぐものですね。それから兄が非常に注目していたのは、生き物たちです。庭っていうのは小さくても豊かな生態系で、そこには実にいろんな植物、虫たち、小動物たち、そして菌糸類から微生物までが暮らす場所だったわけで。「すむ」という言葉も「住」を使えば、人間が主人というような感じですけど、もう一つ、「棲む」がある。そうするともう少し生物界とのつながりが感じられる。兄はそれをよく言っていました。

この兄の文章の中に、先祖とか、祖霊とかが出てきますね。昔、鶴見俊輔さんが言っていたことを思い出します。柳田國男（1875～1962）が『先祖の話』の中で「先祖になる」ということを書いている、それがとても大事なんだ、と鶴見さんはよく言っていました。柳田によれば、「ご先祖になる」ために人はよく生きようとしていたって言うんです。これはちょっと今では想像しにくい感覚ですよ。ね。「人間があの世界に入ってから後に、いかに長らえまた働くかということについて、かなり確実なる常識を養われていた」という柳田の文章があります。ここにも、よく生まれる前と死んだ後の「あいだ」としての人生という考え方が出ていますよ。ね。

さて、この柳田の「先祖になる」という話を最近よく持ち出して刺激的な議論を展開しているのが中島岳志さんです。どういうところから出てくるかということ、スペインのオルテガ・イ・ガセット（1883～1955）やイギリスの G. K. チェスタトン

（1874～1936）などのいう「死者の民主主義」についての話の中なんです。どちらも保守主義と見なされた人たちですが、彼らは当時の民主主義を批判して、今たまたま生きている人間たちだけで、なんでも多数決で決めたらいいんだという考え方こそが問題だと考えたわけです。その時々々の生者の都合で憲法でも変えられちゃう。これが一番危険だと警鐘を鳴らしていたのがチェスタトンであり、オルテガだった。チェスタトンは死者たちにも投票権を、と唱えたほどです。彼らが危惧した通り、ナチス党は多数決で、「民主主義的」に政権についた。

そういう「死者の民主主義」という思想の流れがヨーロッパの中に本当はあった。そういうことをもう一回思い起こして再評価する必要があるんじゃないかっていうことを、中島さんは考えているわけですね。

死者にも投票権をという、馬鹿げていると思うかもしれないけど、実は、僕たちが生きているこの現実っていうのはみんな過去に生きていた人たちによって作られたものでできている。民主主義自体が今は亡き人々が遺した遺産ですよ。物だけじゃなく、制度も、言語も。その言語で考えるんだから、思想も。自分のものだと思っている心も実は過去の遺産です。伝統や文化の全体が死者たちの遺産です。こう考えると、生きている者だけしか視野に入れない自由とか民主主義って、一体なんだろう、ということになりますよね。

過去が、そして死者たちが見えないということは、未来が見えない、ということとも密接に関係していると思うんです。最近、16歳の環境活動家グレタ・トゥーンベリの発言や行動が世界中で話題になっていますが、彼女が怒りと悲しみを込めて言っているのは、大人たちはまるで未来が存在しないかのように生きているじゃないか、ということ。確かに死者たちを排除するやり方は、そのまま、まだこれから生きる人たちを排除することと表裏一体なのではないかと思うんです。グレタさんはいわば、これからの未来を生きる子供や若い人、さらにまだ生まれていない人たちを代弁しているんじゃないか。さっきの「死者に投票権を」

に倣っていえば、未来の人々にも投票権をよこせ、ということになるでしょう。さらに言えば、インドの物理学者で世界的な環境運動家であるヴァンダナ・シヴァが、伝統的な思想を基に創り出した「地球民主主義」、つまり、人間だけでなく、すべての生きものにも投票権を、という考え方にもつながると思うんです。

**高橋** プルーストに『失われた時を求めて』という大変有名な小説があります。これは、途轍もなく長い小説なんですけど、いちばん最後のところで、主人公は躓いて、その瞬間、過去のすべてを思い出す。過去が蘇ってくるんですね。これは、つくづく思うことなんですけど、人間というものは何かといわれたら、その実態は、記憶だと思っただけなんです。今いるぼくたちというのは、まず、この瞬間の自分です。でも、それは、今ここにいる、だけじゃない。ぼくが68歳だとしたら、68年分の時間が、ここにある。「ここ」から、すべての時間が見えてくる。そういうものが個人なんです。だから、記憶喪失しちゃったら、その「人」は全部なくなるでしょう。自分が誰だかわからない、ということは、どんな時間を過ごしてきたのかわからないということです。だから人間というものは時間的存在なんです。そういう風に考えていくと、人間という存在そのものが「あいだ」的なものなんじゃないかと思うんです。ぼくたちは、点として存在しているように見えるけれど、「内側」から見ると、過ごしてきた時間を生きている。だから「幅」なんです。今ここにいる自分は、たまたま、2019年の8月9日、20時50分に切った断面かもしれない。でも、これは長い時間の持続を、ある一瞬でスライスしただけのものなんです。生きる、ということは、時間を生きるということでもあるわけですね。

実は、「死者の民主主義」の話も、そんな具合に理解すればいいのかもしれない。今を生きる個人、だけではなく、遥か以前に亡くなってしまった死者も参加する民主主義が、「死者の民主主義」ですね。そこでは、社会にとっての時間が拡張されている。社会にとって個人は「点」に近いものだけけれど、もっと「幅」を持って人びとを参加させて

ゆく、ということですね。人は、個人としては、誕生から今、そして、死で終わりだけれど、社会は、別の時間を産み出すことができる。死者たちを受け入れた「死者の民主主義」。さらにまだ生まれてない人たちのことを考える「これから生れてくる者たちの民主主義」もあっていいのかもしれない。さっきの柳田國男の「先祖の話」は、ぼくも好きです。これもまた一種の「死者を迎え入れる話」ですよ。そうやって、柳田は、「家」の概念を、拡張させようとした。近代になって、いろんなものの「幅」が狭くされ、断面だけにされていこうとしてゆく中で、広げてゆくことを考えた。柳田國男も生前は頭がおかしいとされていたんですね。死者を迎え入れる、「死者の養子になる」ということを「先祖の話」に書いてありますけれど。柳田の、この、死を生に近づけるという考え方は、人間のマインドというか、在り方としては、実は自然だったんじゃないかと思えます。そういう話をまた次回したいですね。

**辻** 思えば、死者たちが遺したものがなければ、ぼくら生きられない。中島岳志さんは、生者だけの民主主義の暴走を防ぐために、それを補完するものとして、立憲主義が大事なんだというわけなんです。憲法に限らず、どこにも書いてないけどぼくらの生き方を律しているような倫理、道徳、礼儀、常識、態度やふるまい。これら全てがかなり長い歴史をもったものです。

**高橋** そう、死者が作ったものなんです。ここにあるビール瓶だって、ロウソクだって、考え出した人はみな死んでいる。ぼくたちは、死者たちが考え、作り出したものの中で、生きている。でも、そういうふうには普段は思わない。埋葬された死者は生きている自分たちとは関係ないし、社会は生きている者たちによって作られているのだ。そう考えるのは、傲慢だと思います。死者を忘れてはならない。それは浮かれがちになぼくたちを戒めてくれる存在でもあるのです。

## 国と国の「あいだ」

**辻** さて、二番目に行きたいと思います。次は国

と国の「あいだ」です。ぼくも高橋さんも、国際学部というところで仕事をしてきたんですけど、その「国際」という言葉について改めて考えてみたい。これはインターナショナルという言葉の訳語なんですけど、昔は結構熱い言葉だったんですね。60年代とか70年代くらいまで、若者でありながらインターナショナルじゃない奴は駄目だ、格好悪い、という空気があった。なぜかっていうと、ナショナルだけだと、国家主義とか国粹主義者とか、もっとひどいと軍国主義とかにつながってしまう。「反動」っていうイメージ。だったらインターナショナルしかないじゃないか、というわけです。ところがです。ここ40年くらい、段々このインターナショナルっていう言葉は聞かれなくなっていった。どうなっちゃったのかっていうと、簡単にいえばグローバルの中に呑み込まれちゃったってことだと思うんです。国際学部でも、教員や学生のほとんどが、インターナショナルという言葉を知っている場合でも、国際って、要するにグローバルっていうことでしょ、というくらいの理解なんだと思う。

いわゆるリベラル派も、左派って言われるような人でも、インターナショナルという言葉を使わなくなっている。年寄りの繰り言みたいになっちゃうけど、ぼくら若い頃、しょっちゅう歌ってましたよね、「インターナショナル」という歌を。ねえ、高橋さん？「ああ、インターナショナル、我らがもの 起て飢えたる者よ、今ぞ日は近し・・・」これは確か、パリ・コムューン（1871年）の時にフランスで作られた革命歌ですよ。世界中で、まさに労働者階級の連帯を表すものとして歌われただけでなく、ソ連でも、中国でもしばらくは国歌みたいに歌われていた。それってすごいことで、「ナショナル・アンセム（国歌）」として「インターナショナル」が歌われる、というちょっと矛盾した状況だったわけだ。それはまだ、共産主義や社会主義が一国で完結するものではなく、国を超えるものだという理想があった頃のことですね。

ぼくらが若い頃は、右翼は「君が代」、左翼は「インターナショナル」っていう感じだった。でも今

では、「君が代」は前よりよく歌われるし、広く浸透しているようだけど、「インターナショナル」の方はほとんど跡形もない。その後に残ったはずの空白は、しかし、どうなってしまったのか。昔左翼だった人たちはどう考えているのかな、その辺を。

さて、国際学部は1986年にできたんだけど、その意味ではすでに落ち目にあった言葉を学部名にしたんだと思うんです。グローバルという言葉がキーワードとして表に出てくるのが、新自由主義が主流となる1980年代後半、日本では主にバブル崩壊後の1990年代でしょう。だから国際学部というものの中身が、創設から10年、20年を経て、人々の意識の中で、少しずつ、インターナショナルからグローバルへとすり替えられていったんだろう、というのがぼくの印象です。でもこれは左から右への転換だとか、保守化とかという問題じゃないんですね。

じゃあ国際って何かと言うと、インターナショナルの「インター」が「あいだ」を意味するのと同じように、「際」っていうのは「きわ」ですから、元々は国と国の「あいだ」を意味する言葉だったわけです。実際、この学部を創った人たちはその「あいだ」に注目していた。「あいだ」といっても線としての国境じゃない。線は「あいだ」の否定です。そうじゃなくて、現在「国」と「国」の境界と言われているものの両側には、かつて広大な領域が広がっていた。何百年、何千年の間、人々はもちろん、モノもタネも様々な生きものも行き来していた。そういう豊かな交流の時空間があった。そこから現代世界におけるいわゆる国際問題とか、宗教対立、民族紛争などを考えていこう。そして、そこから平和という目標にアプローチしよう、というのが、国際学部を創った人たちの中にあつた発想だったんじゃないのかなと、ぼくは今頃、国際学部でのぼくの仕事ももう終わりに近づいた頃にそういうことを思っているんですね。じゃあ、一方のグローバルというのは何なのか、というと、国と国の「あいだ」から考えるという「国際」の考え方と対照的に、国の次元を一挙に超えて、いかに世界中に経済市場を広げるか、と

いう発想です。いわばブルドーザーで世界を均してしまおう、という効率化、均質化の考え方です。

さてそこで、一枚だけ写真（写真1）を見てもらいたいですけど。

みなさん、この門は何だと思いませんか。これ、国境なんです。手前がブータン南東部で、向こう側がインドのアッサム州です。みなさんの中に国境というものを歩いて渡った経験のある人どのくらいいますか。多くはありませんよね。ぼくたち日本に住んでいると、外国のことを「海外」というくらいで、島国だから国境を具体的に意識することがほとんどない。飛行機に乗って、眠ったりとご飯食べたりしているうちに、向こうに着く。そうしたらもう違う国なんですから。

国境を歩いて渡るといのは大切な経験なんじゃないかな。このインドとブータンの国境は川も何もない平らな場所なので、なおさら、なんだ、ただ人間が線を引いて、そこに塀を建てて、国境と呼んでいるだけじゃないか、ということがよくわかる。かつてはろくに塀もなく、人びとは自由に行き来していたようです。ただ、この20年くらい前から、国境をまたいでインドからの解放を目指すゲリラなどが活動し始め、一時はかなり緊張が高まった。でも今はまた平穏が戻ったので、呑気なもんです。この近隣に住んでいる人たちは割

と自由に行き来して、国境の反対側で働いたり、モノの売り買いをしたり学校へ行ったりしています。

東南部ブータンで人々からよく聞くのが、三、四十年くらい前までは、村によっては毎年冬場には総出で山を降りて、今の国境を越えて、インド側の集落を訪ねて過ごしたっていう話です。家畜もみんな引き連れて。民族的にも文化的にも親近感のある少数民族のところに行くことが多かったようですが、それでも何百人からなる村が丸ごと異文化の中に滞在する。これは大昔から行われてきたことだそうで、ホストの方でも、まるで親戚を迎えるように喜んで迎えたというんです。そこではもちろん、交易が盛んに行われるんですが、でも単にモノの交換ではなく、人的な交流も盛んで、子供たちにとっては何よりの楽しみだったという。暖かい季節には逆にインドの側からも人々が頻繁にやってきたという。こんなに豊かな交流があったなんて、今では想像しにくい。ブータン人にも知らない人が多いと思うんです。

次に、もう一つの「国境」のあり方を見てみたいと思います。高橋さんとの前回の対談でも触れたイスラエルとパレスチナの国境のことです。国境といっても、パレスチナはまだ正式には建国されていないし、自治政府があるとはいえ、未だイ



写真1



スラエル占領下にある。またガザは封鎖されているし、ヨルダン川西岸自治区もほとんどがイスラエルに実質支配されている。イスラエルはどんどん入植を進め、その入植地を守るという名目で行ったところと分離壁という壁を巡らせている、といったことを前回話しましたね。その壁の両側に広がる世界はととても非対称的です。これも前回話したように、この非対称性の特徴は、壁を作り押し付ける側の方から、ますます向こう側が見えなくなっていくということ。イスラエル側の人たちは、壁を作れば作るほど、どんどんパレスチナ側のがわからなくなっていく。ところがパレスチナ側の人たちは、イスラエル領にも、東エルサレムにもたくさん住んでいるし、多くの人が毎日仕事をしに行き来もしているわけです。もちろん時間をかけてチェックポイント（検問所）を通るんですけど。だから、パレスチナの人たちは、世界が狭くなっていないんです。壁の両側が割と見えている。

この壁という境界から、遠く身を引き離して、その両側が見える位置に自分を置いたイスラエル人と、前回の対談の後、会って親しくなりました。ダニー・ネフセタイという人で、秩父の山奥に住んで、家具職人として働いたかわら、平和活動に熱心に取り組んでいる人です。愉快で面白い人で、一緒にいるだけで楽しくなってくる。ネットで彼の講演の動画も見られるし、彼の人生や思想がわかりやすく書いてある『国のために死ぬのは素晴らしい？』（高文研）という本もあります。大学にも来てもらって、講義をしてもらいました。彼の話聞いて、国と国の「あいだ」というテーマについて、改めて考えさせられるわけです。

イスラエル生まれで、40年近く前に日本に来るまでは普通のイスラエル人の若者として生きていた。高校卒業後、徴兵制がありますから、3年間空軍の兵士をやって、最後にパイロットになるテストがある。本物の兵士になる。しかもパイロットはエリートです。でもそれに彼は落第しちゃったんですね。40名受かるところ、彼は42番目だったという。がっかりしたけど、仕方がない、兵役を終えた他の若者と同様、彼も旅に出ることにし

た。

さてその兵士だった時のこと、時は1970年代、1967年の戦争でイスラエルがパレスチナを占領した後のことです。彼は基地に勤めている。五日間くらい基地に住み込んで働くと、小さい国のことですから、週末は誰もが自分の家に帰る。その頃は週末にしょっちゅうデモがあったそうで、彼ら兵士の多くはそのデモに行っていたっていうんです。何のデモかという、反戦デモなんですね。そういうデモに参加して戦争反対を叫んで、また五日間は兵士として働く。そこに彼はなんの矛盾も感じていなかったという。兵士になった時はずっとうれしかった。これでやっと、先人たちが二千年の迫害の歴史を経て作り上げたイスラエルという国のために働けるということを心から喜んでた。しかし、一方で彼が家族、親族、そしてコミュニティの人たちと共有していた反戦という信念も揺るぐことはなかった。

また、当時はイスラエル占領下とはいえ、友だちづき合いでも、買い物でも、観光でも、商売でも、パレスチナ側には自由に行くことができた。

兵役を終え、どこか遠いところに暮らすのに、多くの若者が金がかからないアジアや中南米を目指した。ダニーはアジアに行ってみた。地図上で見ると、日本がやけに近く見えて、世界で一番高い国と言われてたけどちょっと行ってみよう。戦争を放棄した平和の国という日本のイメージに憧れたと言います。日本に来てみたら、意外とお金なしに暮らせる。「パンノミミ」というマジックワードだけ覚えて、パン屋さんに行くと食べ物もらえる。一週間くらいいてもお金を使わなかった。それに味をしめて、しまいには日本に移住してしまう。

彼のバックグラウンドですが、父方の祖父母がポーランドから1920年に、母方の祖父母はドイツから1924年に、イギリス統治下のパレスチナにやってきた。1948年にイスラエルという国ができるまで、ユダヤ人もこの地をパレスチナと呼んでいたんですね。そのポーランド出身のおじいさんですが、その出身地の町がなんとあのアウシュビッツなんです。彼がパレスチナに移住した後に、

ナチスドイツが台頭し、ポーランドを占領し、しまいにホロコーストで彼の一族は、遠い親戚まで含めて全滅します。彼自身はパレスチナで結婚し、子供や孫に恵まれ、ユダヤ人の国イスラエルも生まれました。しかし、1950年代になってとうとう何かに耐えきれなくなって自殺してしまう。

ダニーが2008年にイスラエル人女性によって書かれた『空間と意識からの消去』（邦訳なし）という本を紹介してくれました。それによるとイスラエルが1948年の独立とともに、418にもものぼるアラブ系パレスチナ人の村々を破壊し、60万～76万人もが殺されたり、近隣の国々への難民になったりした。イスラエル政府は、物理的に村々の痕跡を、また意識や記憶から事実を消し去ろうとした。そのやり方が実に周到なものだった、という。そのことを知っているイスラエル人は非常に少ないそうです。

さきほどの高橋さんの話にも出てきたエルサレムでのアイヒマン裁判が行われたのが1961年。これもダニーに聞いたことですが、その裁判の後に、後に首相にもなるゴールドメイヤーという女性閣僚が非常に重大な発言をしているんです。「これだけのことが我々ユダヤ人に起こったということが判明した以上、これからは世界の誰も私たちを批判することはできない」。こういう発言です。そして、ダニーによれば、この言葉、この考え方が今のイスラエルを作った。今のイスラエル国家ってというのは、この言葉の上に建てられたというんです。1957年生まれのダニーにもこの考えがいつの間にか刷り込まれていた。そのことに気づいたのは日本に来てからだ、と。

日本にやってきてからも彼は反戦平和の活動を続け、パレスチナ問題に関してイスラエルへの批判的な意見を発信し続ける。そういう彼にさらなる人生の転機がやってきたのは、2008年と2011年だそうです。2008年には、イスラエルによるガザ地区への激しい攻撃があって、1400人のパレスチナ人が殺害された。そのうちの450人が子供だった。ダニーはこれに衝撃を受けたんです。さっき試験でダニーが42番目で落第したって言ったでしょ。受かってパイロットになった40人は全

員、間違いなく空爆で人を殺している。彼も受かっていたらきっと殺していた。それは確かだ、と彼は思ったそうです。イスラエルを常に批判しながら、それでも根本的なところではその自分の国を信じてきた。しかしその国が一举に子供を含むそれだけの人々を殺害した。

しかも、この時にはなぜか、国内から何一つ疑問が出てこない。不審に思った彼は知っている人に片端からメールを送りまくった。自分の親戚、友人たちはもちろん、政府の人、軍人、活動家にまで。でもその誰もが、それまで反戦の立場にあった人も含めて、「これは仕方がなかった」と言う。これを機に、ダニーは国というものの自体を疑わなければならない、というところに一歩進み出ていきます。

次の転機は2011年の福島原発事故です。ここでも彼は国というものの本質を見せつけられることになった。そして、それ以来、彼は自分の仕事の半分を家具作り、半分を平和のための活動というふうに決めたというんです。ちなみに彼が好きな家具はちゃぶ台。角がなくて丸いから、皆でそれを囲めば誰もが中心。そこに平和の思想が体現されている。だからそれを作ることで自分も平和に寄与しているんだって。

こういう彼の話には、国というものについて考えさせられることがたくさんあると思うんです。多くの問題が国と国の対立から起こるように見えるけど、そもそも国の成り立ちそのものに、本質的な問題があるのではないかと。ずっと父祖の地を離れ、国を持たずに、世界中に散らばって、迫害されながらディアスポラに生きてきたユダヤ人が、自分たちの国を作った途端に、何か本質的な問題を抱え込むことになる。そして今度は他者を迫害し、難民化させる側へ向かってどんどん変質していく。そうすると、どうも国と国の「あいだ」から問題が起こるといふより、むしろ国そのものが「あいだ」を見えなくしてしまう性質を持っているらしい。人々は国に取り込まれていけばいくほど、国と国の「あいだ」を見失っていく。国は国境という線によって成り立っているわけですよ。でもさっきも言ったように、その線は同時に

「あいだ」を消し去る。つまり、国境は「あいだ」をなくすことで国を作る。

高橋さんが話してくれた「あいだを作る」、「あいだを生きる」、「あいだを動く」というのは、国と国の「あいだ」に関しても言えることですね。国家というものに絡めとられて、身動きできず、想像力も働かないようにされないためには、「あいだ」が秘めている力が必要だと思うんです。さて、今日はこの辺にしておこうかな。

## まとめ

**高橋** 今の辻さんの話を聞いて、次回以降のイメージがはっきりしてきたので、ちょっと話させてください。国と国の「あいだ」という話でしたが、ぼくもさっき、江藤淳の話をしました。彼の書いたものは、「アメリカと私」のように、「国」と「人」がはっきり分かれています。江藤淳は、保守主義者、国家主義者ともいわれましたが、個人が国家に埋没することにははっきり反対していたと思います。そこに、明らかな分離、「と」が挿入されていました。国家のような巨大なものの前に、個人として、「と」と形を媒介にして、立ち向かう。それが、江藤さんにとっての「文学」の在り方でした。

今、みなさんもご存じのように、ヘイトスピーチや嫌韓といったことばで象徴されるような、攻撃的な人たちが増えています。彼らの、考え方の根底にあるのは、ある特定の集団への帰属意識です。彼らが帰属している集団とは、一義的には「日本」という国ですが、それも現実のものであるというより、彼らが信奉する「日本」という国なのです。そして、そんな「国」と一体化して、反対者を攻撃している。そのとき、「私」＝「国」で、自分を攻撃する者は、国を攻撃している、という論理です。けれど、国家と人は違います。まず、何かに帰属するとはどういうことか、を考えなければなりません。そのためには、いったん、国とも手を切って、そこに「と」を媒介させなければならぬのです。国はある、人もいる。そして、この場合、「と」は、ふたつのもの間の距離なので

す。日本という国家 VS 自分。そんな場面について考えてみる。極端なことをいうと、これが、なにかを考えるとということだと思います。そのためには「あいだ」を作らなければならない。そうしないと、きちんと考えることは困難です。国と国とを勝手に戦わせる人たちに対しては、いや、そうではない、考えるべきなのは「国と自分」なのだといわれなきやならないと思います、それが一つですね。

**辻** 前に出た「死者の民主主義」という話を敷衍して考えれば、「国」というのもとても新しい物語ですよね。だからその国っていうのが生まれる以前の人間の在り方とか、交流の仕方とか、そういうものから考えない限り、平和探求とかね、平和をどうやって実現するかという問いは、とても虚しいものになるんじゃないかと思うんです。ぼくの場合は「文化」という概念を中心に置くんですけど、考えてみれば文化というのはいつも「死者の文化」なんですよね。だってそうでしょ、ぼくたちは生まれてから文化を作ってるわけじゃないですから。ただ死者たちが営々と作り積み上げてきた文化の中に生まれてくる。そしてその中に浸されて育つ。何千年、何万年の間、人々はそうしてきた。その意味では、言語だって「死者の言語」です。しかし、現代世界は伝統文化が継承されにくい、歴史的にとっても異常な状態の中にあると思います。ぼくたちの時代というのは、死者からの分離、過去からの分断、そして文化の破壊こそが、「自由」の名のもとに追求されてきた「反文化」の時代だと思う。その意味でも危機的な時代だけど、文化を再生させていくとか、創り直していくっていう意味では、考えようによってはエキサイティングな時代なのかもしれません。

さて、ぼくたちの「あいだの研究」の今後ですけど、一つ考えていきたいテーマだと思っているのが、「自由」です。民主主義の話が出ましたけど、世界各国でそれを脅かしているのが経済的自由主義とか、新自由主義とかといわれる思想です。「自由」が変なところに持ってかれてますよね。金儲けの自由、他者を蹴落とす自由、環境を壊す自由、未来の世代の資源をとりつくす自由とか。その意

味で「自由」は始末に負えない言葉なんだけど、しかしぼくらにとってはかけがえのない言葉でもあったはずですよ。だからそれを最初から考え直さなきゃいけないんじゃないか。その時に大事なのが「あいだ」だと思うんです。「あいだ」について考えることを通じて、自由の本質的な部分が見えてくるんじゃないかな、と。

文化を壊す、人間と自然界の間の関係性を壊す、コミュニティを壊すことが自由である、つまり、「あいだ」を壊すことが自由であるというマインドセットにぼくらはまりこんじゃったんじゃないかなと思うんです。そういうフィクション、そういう物語の中にはまりこんでしまっているのではないかと。でも本来は、何かと何かの間にある関係性にこそ、自由の基盤があったんじゃないか。ぼくにとって今、特に大切な言葉は「制約」です。そして、「制約からの自由」の代わりに、「制約への自由」というのを考えてみたいと。今回も触れたオルテガという人が、「民主主義の本質は制約であり、不自由である」とさえ言う。また、カール・ポランニーは「義務や責任から自由」なんじゃなくて、「義務と責任を担うことによって自由」なんだ、と。ちょっとギクッとするでしょ。でもぼくらが向き合わなきゃいけないのはそういうことなんじゃないかな。まるで自然界の制約なしに生きているかのような、空気や水に依存しないで生きているかのような幻想から離れていかなきゃいけない。そういう意味で、自由と「あいだ」ということをぜひ掘り下げていきたいです。

**高橋** これよく言うんですけど、資本主義の本質は何か。創造的破壊、クリエイティブ・ディストラクション。クリエイティブという言葉が付いているんでうさんくさい。でも要はディストラクションなんですよ。外部を見つけて壊す。壊して資源にして消化する。これが資本主義の一種の本能になる。外に向かって壊していく。それを資本主義の推進者たちはクリエイティブ・ディストラクションと言葉で言ってきた。これが怖いのは、クリエイティブじゃなくて、ディストラクションだってことは認めているんだよね。言っていることは保守主義。破壊するということはそんなに難

しいことじゃなかったんですよ。実は文化に関しては、破壊よりも守る。メンテナンス、維持する、過去をさかのぼる、みたいな方がずっと難しく、歴史の長いスケールを考えながら考えていく必要がある。

ちょっと宣伝になりますけど、10月にぼくの全訳した論語が出ます。20年かけて全訳しました。550ページもあって、オリジナルの5倍くらい長い(笑)。

**辻** さっきの「3行目、4行目」みたいな「あいだ」がいっぱい入ってるんでしょう。

**高橋** 最初に『論語』を読んだ時、すぐつまらなかった。でも、繰り返し読んでいくうちに、もしかしたら、読み間違っているんじゃないのかと思ってきたんです。今から2500年前の本ですからね。当時の中国の状況とか、常識とかを知らないで読むとつまらない。でも、そういうシチュエーションを考えながら読んでいくと、実は、けっこう面白い。何が面白いって、特に政治や社会の問題に関しては、2500年前も今もほとんど変わらないということです。人間の文化には、進化する、進歩するものと、変わりようのないものがあって、変わりようのないものに関しては、大昔でも、きわめてシャープにものを考える人がいることがわかって、勉強になりました。もしみなさんも興味があったら読んでみてください。

**辻** 「変わらないために変わる」という名言もありますよね。ということで、時間になりました。皆さんお楽しみいただけただけでしょうか。どうです、「あいだ」、なかなか面白くなりそうでしょ？